

大阪公共図書館協会会報 2024.3 No.175

第71回（2023年度）大阪公共図書館大会開催 GIGA スクール時代の子どもの読書活動支援

第71回大阪公共図書館大会は、「GIGA スクール時代の子どもの読書活動支援」をテーマに11月22日（水）、大阪市立中央図書館5階大会議室を会場に開催されました。

大阪公共図書館協会の田中会長より開会のことを、会場館である大阪市立中央図書館の西館長より祝辞をいただき、大会がスタートしました。まず、人間文化研究機構 人間文化研究創発センター（国立歴史民俗博物館）特任准教授の大井将生氏による基調講演、次いで2件の事例発表があり、その後に質疑応答・鼎談が行われました。今年度は、隔年実施の研究委員会発表が行われないため、午後1時30分開会の半日日程で開催し、のべ55名の参加がありました。

基調講演は、「GIGA スクール時代の学校に図書館コンテンツをつなげる、活かす」と題して、デジタル資料と教育を繋ぐ「人」と「データ」のネットワークデザイン研究に従事されている大井氏により行われました。豊富な経験を元に、デジタルアーカイブの重要性や教育現場での活用法、多様な資料の教材化事例について、熱く語られました。

休憩をはさみ、「スクール・エンパワーメント 学校図書館活用とICT活用」と題して、熊取町立熊取北中学校司書教諭の紀之定美知代氏より、熊取町立熊取北中学校の取り組みについて、事例発表がありました。学校図書館の蔵書とChromebookを用いた調べ学習やポスターセッションなど、これまでの学校図書館活用とGIGAスクール構想からのICT活用のベストミックスを図る取り組みについての発表がなされました。

引き続いて、長野県高森町立高森北小学校学校司書の宮澤優子氏より、「GIGA スクール時代の学校

図書館」と題して、GIGA スクール時代の中で学校図書館を全ての児童生徒が自力で使えるようにするため、公共図書館と連携した図書館サービスの実現や学校図書館の機能の充実に努められた、高森町立高森北小学校及び高森町子ども読書支援センターの取り組み事例の発表がありました。

その後、大井氏、紀之定氏、宮澤氏の3名に壇上にお上がりいただき、質疑応答及び鼎談が行われました。GIGA スクール時代の学校図書館と公共図書館の在り方について、それぞれがどのように協働することで教育展開に寄与できるか、公共図書館はどのような着眼点で取り組むべきかなどについて言及され、盛会裏に閉会しました。



【基調講演】

GIGAスクール時代の学校に図書館コンテンツをつなげる、活かす

人間文化研究機構 人間文化研究創発センター
(国立歴史民俗博物館)
特任准教授 大井 将生 氏

【デジタルアーカイブとは何か】

はじめに、教育活用の目線から、デジタルアーカイブの特徴を紹介された。

1. 資料の多様性：貴重資料だけでなく、地域の資料も重要で、絵画や広告、地図、写真、動画など、様々なコンテンツが対象になる。
2. コンテンツの信頼性：情報リテラシーを育むために、資料の信頼性（誰が作ったのか）を子ども達に注目させる必要があり、図書館や自治体がつくるデジタルアーカイブが今後の重要な学習基盤となる。
3. 資料を読み解き、身近に感じさせるための機能性：古文書画像に翻刻文を重ねる機能や古地図に現在の地図を重ねる機能など、学校で使える工夫が増えてきている。また、画像を高精細かつ国際的に相互運用性が高い方法で公開すると、画像の細部まで詳細に見ることができ、身近に文化資源を感じることができる。

【多様なデジタル資料が必要な背景】

現代の社会では、膨大な情報の中から重要なことを主体的に判断して、そこから新しい価値を生み出す力が求められており、新学習指導要領では、図書館の活用や探究学習、ICTを活用して情報リテラシーを身につけることの重要性が明示されている。

学びの変革が求められる中で、GIGA スクール構想の生徒一人一台端末は実現したが、紙の代替でないデジタルの学習方法に関する議論や実践がまだ不十分であったり、探究学習には多様な資料を収集できる学習環境が必要であったりという課題もある。課題の共通点として、Web上で多様な資料を活用できる学習環境が求められており、多様な資料を収集しているデジタルアーカイブが現代の教育をめぐる様々な課題を解決する重要な基盤になる。

【どのようにデジタルアーカイブを活用するか】

国の分野横断統合ポータルであるジャパンサーチを活用した事例を中心に、デジタル資料を教材化した実践例が紹介された。ジャパンサーチは、多様な資料を横断的に検索でき、二次利用条件が明示されていることから教育との親和性が高く、ワークスペースという共同編集機能も授業を行う際に便利だという。実践例では、子どもが自ら立てた問いに接

続する多様な資料を収集し、他者との協働的な考察を通して、新たな知や問いを生み出す「キュレーション学習」の手法を用いて、一つの資料から自由に問いが始まり、学びが深まる様子が語られた。実践研究を通して、小学校から高校まで、主体的で探究的な深い学びができることが分かっているようだ。地域資料は学びを身近な自分ごととして捉えるきっかけになるため、地域資料の専門家としての図書館の役割も重要である。

【デジタル資料の教育活用における課題】

一方で、デジタル資料を教育に活用する際の課題も残っている。必要なデジタル資料が見つからないという問題と活用できないという問題がある。資料が見つからない場合には、デジタル化されていない場合とアクセシビリティが欠如している場合があり、図書館には地域資料のデジタル化と教育現場の目線に基づいた位置情報や学習指導要領コードなどのメタデータの付与が期待されている。また、デジタル資料を見つけることができて二次利用条件の問題で授業に活用できないこともあるという。多忙な教育現場での活用を促進するためにも、デジタル資料をオープンなライセンスで公開することが非常に重要である。

【S × UKILAM（スキラム）連携】

デジタル資料の教材化について、教師には教材化の準備の時間が十分に取れないという悩みがあり、デジタル資料が利用される図書館は自館の資料の活用事例を知りたいという悩みを持っている。教師と図書館員や学芸員、研究者などの多様な立場の専門家をつなげるS × UKILAM（スキラム）連携という取り組みがある。今後は教師だけが教材化を考えるのではなく、図書館もその中核的なパートナーとして共創で進めていけると良いという。自治体単位でスキラム連携のワークショップも行われており、泉大津市立図書館での教材化ワークショップの事例も紹介された。

最後に、子ども達の学びが豊かになるように、図書館と協働・共創で取り組みをこれからも続けていきたいという講師の言葉で基調講演は締められた。



【事例紹介①】

**スクール・エンパワーメント
学校図書館活用とICT活用**

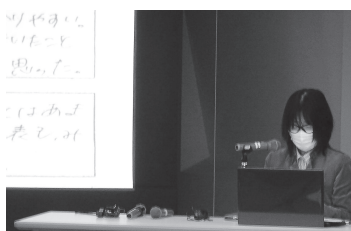
 熊取町立熊取北中学校
司書教諭 紀之定 美知代 氏

熊取北中学校は、朝の読書活動やビブリオバトル、小学校への読み聞かせ活動、町内の学校の図書委員交流会など、読書活動が非常に盛んな学校である。ビブリオバトルも活発に行われ、全学年で取り組んでいる。平成 27 年度に大阪府のスクール・エンパワーメント推進事業の「学校図書館を活用・充実するためのモデル校」に指定された。また、こうした活動が認められ、平成 31 年には子供の読書活動文部科学大臣賞を受賞した。

モデル校指定 1 年目は「言葉の力を育もう」を目標に、学校全体で取り組んだ。作成した「学校図書館授業計画一覧」を元に全ての教科で図書館を積極的に利用し、事前に校内での研修も行った。数学では、生徒たちが数学を身近に感じられるように朝日ジュニア年鑑を活用し、ヒストグラムを作成した。理科では、学校で見つけた昆虫等を調べ、生き物になりきり詩を作る授業を行った。社会では、フィールドワークを行い、公民館で展示した。国語では、方言辞典を作成した。西洋美術史・日本の歴史・日本の文学史を比較し、パネルにまとめるなど、科目を横断した授業も行った。

2 年目は教科横断を重要課題とした。2 年生は東日本大震災、3 年生は生態系をテーマにした。この年は GIGA スクール構想によりタブレット端末が導入されたため、Chromebook の授業での利用方法を考える必要があり、図書館で実際の資料を使い調べる時間と Chromebook を用いてインターネットで調べる時間を設定し、両方とも使いこなせるようになるよう配慮した。インターネットでは動画なども活用でき、授業でのインターネット活用を模索した年だった。

学校図書館が活用されている、という土台が重要であり、その上で ICT 活用を考えていく必要がある。インターネットと本のメリット・デメリットを把握し、使い分けて必要な情報を得ることが大切である。学校図書館と ICT、両方を活用できるような情報活用能力の推進を行ってきたい。



【事例紹介②】

GIGA スクール時代の学校図書館

 長野県 高森町立高森北小学校
高森町子ども読書支援センター
司書 宮澤 優子 氏

現在の学校図書館には、物が無い、人がいない、場がないという課題がある。その課題を解決するために高森町では子ども読書支援センターを稼働させ、不足している物や人と場を確保するための仕組みを確立した。町内の図書館的資源を最大限に活用し、学校図書館の機能強化を図っている。

まず、読書センターの機能として、GIGA スクールで導入した端末を活用し、子どもたち自身の公共図書館へのリクエストの仕組みと電子図書館を導入した。学校図書館だけでは 9,000 冊の蔵書だが、町立図書館や南信州図書館ネットワークを物流を含めて利用し、120 万冊の資料の提供が可能になった。さらに電子図書館の導入で電子書籍の提供も可能になり、子どもたちの読書の手段と本との出会いの選択肢を増やすことができた。

次に、学習センターとしての機能を果たすために、授業者と綿密な打ち合わせをし、潤沢でインパクトのある資料を提供することとした。紙の資料はもちろん、動画や音声データの提供、デジタルアーカイブの URL を子どもたちに配布するなど、紙とデジタルが併用されるようになった。また、地域資料のデジタルデータがない場合は、スマホで 3D データを作成したり、ウィキペディアに情報を書き込み、インターネットを検索すると表示されるようにするなど、情報の作成、広報、使い方の提案をし、活用につなげている。

さらに情報センターでは、情報活用能力指導年間計画と指導用教材を作成した。指導用教材は教科書で使用されている単語や用語が指導できるようシナリオ付きで活用できるよう準備した。

今後の課題は、子どもたちには端末の操作・タイピング、デジタルシティズンシップ教育、著作権や肖像権のスキルの習得が必要と考える。また大人もそれに合わせた ICT スキルや ICT を活用した学びのデザインが必要になっている。

最後に、学校図書館は子どもたちの一番身近な図書館である。児童・生徒が社会に出る 10 年後に必要な能力を支えるため、子どもたちの学びを常に軸足として活動している。

質疑応答・鼎談

質疑応答：

事例報告の後、基調講演の大井将生氏、事例報告の紀之定美知代氏、宮澤優子氏の3名への質疑応答が行われた。

参加者からは、公共図書館が作成したデジタルアーカイブのコンテンツを、授業で使えるようにするための工夫や、ビブリオバトルが不得意な生徒へどのような働きかけをされているか、中長期的に続ける効率的なコレクション構築のほかに、公共図書館に望むことはあるか、等の質問が挙がり、各講師からは以下のようにご回答いただいた。

- ・デジタルアーカイブ資料は素材だけでは成立しない。どの学年にどのように使えるか作り上げる必要がある。公共図書館が主催者となり、素材を組み合わせ提案し、キュレーションしてほしい。公共図書館の作ったデジタルアーカイブのコンテンツを授業で紹介することもある。

- ・生徒への働きかけについては、教室全体の雰囲気作りが大切で、アイデアを思い付かない子も、皆がやっている雰囲気の中では自分も何かやりたくなる。自分の知っているジャンルから提案してくるようになる。

- ・子ども達にとっての「自分ごと化」は非常に重要。自分の住んでいる地域は全員にとって自分ごとになる。公共図書館に望むのは、まず、地域資料の収集保存。また、積み重ねてきたイベントの情報は貴重なので、子ども達に届くように工夫してレファレンス資料の一部として、地域資料の公開、発信をしてもらえると、ICTの側面からも、自分ごとになっていくのではないかな。

鼎談：

最後に、GIGA スクール時代の学校での取り組みについて、講師3名による鼎談が行われた。その中では、

- ・大人が面白ければ、子どもにも伝わり、興味をもってもらえる。最初は、子ども達に「これは面白そうだな」と興味をもってもらえるような仕掛けを沢山大人が作り、子どもが上手のっていくようにする必要はあるが、慣れてくれば、子ども達自ら上手く考えるようになってくる。

- ・学校には独特の時間軸がある。学校側への対応はスピード感が大切であり、学校の時間軸を公共図書館側でもぜひ理解してほしい。学校は「今日欲しい。明日欲しい。」が日常的に多くある。それに対応で

きるほど学校図書館が準備できていればいいが、そうでない場合もあり、1回で準備できない＝活用できないにつながり、最初の活用の段階で上手くいかない。学校では年間スケジュールが年初に出ってしまうので、そこに組み込んでもらいやすいように教師が見慣れた年間スケジュールに含みやすいような提案をしていくのが望ましい。情報を探り、前もっていかに準備できるか注力して欲しい。

等、様々な活用事例、失敗事例なども交えた話がされた。

インターネットで得たデータ素材も図書等の紙媒体も、各々の特徴を理解した上で、どちらも併用して活用することが大切であることや、インターネットの情報には間違った情報、悪いものも含まれていることも知らせた上で、自分達で比較、検討して選んでいくことを、教育の現場で子ども達に教えられていることに感銘を受けた。

学校の時間軸と公共図書館の時間軸の違いという視点については、学校に関わる際には、学校の状況を理解して、関わっていけるように心がけていく公共図書館の姿勢も大切であると感じた。

子ども達に興味をもってもらえるような仕掛けを沢山作ることにについては、公共図書館としても参考になる工夫である。

「共有していくことを大事にしていきたい。相手の思いを汲んで自分ごとにしていく。または映像を見て感じたこと、考えたことを共有していくことで、生徒同士を繋いでいくのが基本になっていくと思う。」という話もあり、共感力と、他の人の課題を自分ごとにして子ども達に育てることは、将来、人の痛みに関心でき、ほかの人の課題を自分ごととできる大人を社会に増やすことにもなると思う。

「今回は、立場の違う3人の講演、事例発表だったが、公共図書館からの視点が抜けているため、次は参加者が公共図書館で何ができるのか考えていただきたい。」と締めくくられた。我々が他のポジションの人と繋がることの重要性を念頭に、今後学校と連携し、公共図書館として何ができるか考えて推進していかねばならないと感じた。



※本号の報告は、会報委員の執筆です。